鸚鵡

――大震覚え書の一つ――

芥川龍之介

これは御覧の通り覚え書に過ぎない。覚え書を覚え書のまま発表するのは時間の余裕(よゆう)に乏しい為である。或は又その外にも気持の余裕に乏しい為である。しかし覚え書のまま発表することに多少は意味のない訣(わけ)でもない。大正十二年九月十四日記。

本所横網町(ほんじょよこあみちやう)に住める一中節(いっちうぶし)の師匠(ししやう)。名は鐘大夫(かねだいふ)。年は六十三歳。十七歳の孫娘と二人暮らしなり。家は地震にも潰(つぶ)れざりしかど、忽ち近隣に出火あり。孫娘と共に両国(りやうごく)に走る。携(たづさ)へしものは鸚鵡(あうむ)の籠(かご)のみ。鸚鵡の名は五郎(ごらう)。背は鼠色、腹は桃色。芸は錺屋(かざりや)の槌(つち)

の音と「ナアル」（成程の略）といふ言葉とを真似るだけなり。

　両国より人形町へ出づる間にいつか孫娘と離れ離れになる。心配なれども探してゐる暇なし。往来の人波。荷物の山。カナリヤの籠を持ちし女を見る。待合の女将かと思はるる服装。「こちとらに似たものもあると思ひました」といふ。その位の余裕はあるものと見ゆ。

　鎧橋に出づ。町の片側は火事なり。その側に面せるに顔、焼くるかと思ふほど熱かりし由。又何か落つると思へば、電線を被へる鉛管の火熱の為に熔け落つ

るなり。この辺（へん）より一層人に押され、度（たび）たび鸚鵡（あうむ）の籠も潰（つぶ）れずやと思ふ。鸚鵡は始終狂ひまはりて已（や）まず。丸（まる）の内（うち）に出づれば日比谷（ひびや）の空に火事の煙の揚（あ）がるを見る。警視庁、帝劇などの焼け居りしならん。やつと楠（くすのき）の銅像のほとりに至る。芝の上に坐りしかど、孫娘のことが気にかかりてならず。大声に孫娘の名を呼びつつ、避難民の間（あひだ）を探しまはる。日暮（にちぼ）。遂に松のかげに横はる。隣りは店員数人をつれたる株屋。空は火事の煙の為、どちらを見てもまつ赤（か）なり。鸚鵡、突然「ナアル」といふ。

翌日も丸の内一帯より日比谷迄（まで）、孫娘を探しまはる。

「人形町なり両国なりへ引つ返さうといふ気は出ませんでした」といふ。午(ひる)ごろより饑渇(きかつ)を覚ゆること切なり。やむを得ず日比谷の池の水を飲む。孫娘は遂に見つからず。夜は又丸の内の芝の上に横はる。鸚鵡の籠を枕べに置きつつ、人に盗(ぬす)まれはせぬかと思ふ。日比谷の池の家鴨(あひる)を食(く)らへる避難民を見たればなり。空にはなほ火事の明(あか)りを見る。

三日(みつか)は孫娘を断念し、新宿(しんじゆく)の甥(をひ)を尋(たづ)ねんとす。桜田(さくらだ)より半蔵門(はんざうもん)に出づるに、新宿も亦(また)焼けたりと聞き、谷中(やなか)の檀那寺(だんなでら)を手頼(たよ)らばやと思ふ。饑渇(きかつ)愈(いよいよ)甚だし。

「五郎を殺すのは厭(いや)ですが、おちたら食はうと思ひま

した」といふ。九段上へ出づる途中、役所の小使らしきものにやつと玄米一合余りを貰ひ、生のまま噛み砕きて食す。又つらつら考へれば、鸚鵡の籠を提げたるまま、檀那寺の世話にはなられぬやうなり。即ち鸚鵡に玄米の残りを食はせ、九段上の濠端よりこれを放つ。薄暮、谷中の檀那寺に至る。和尚、親切に幾日でもゐろといふ。

五日の朝、僕の家に来る。未だ孫娘の行く方を知らずといふ。意気な平生のお師匠さんとは思はれぬほど憔悴し居たり。

附記。新宿の甥の家は焼けざりし由。孫娘は其処に

避難し居りし由。

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。